

弘化四年善光寺地震における 煤花（裾花）川の土砂災害とその後の対応

宮下 秀樹¹・山浦 直人²・井上 公夫³

¹正会員 榑守谷商会 品質技術本部（〒380-8533 長野県長野市南千歳町878番地）
E-mail: hmiyashita@moriya-s.co.jp

²正会員 株式会社千代田コンサルタント（〒388-8011 長野県長野市篠ノ井布施五明341-7）
E-mail: yama3417@mx2.avis.ne.jp

³（一財）砂防フロンティア整備推進機構（〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4砂防会館別館6F）
E-mail: k-inoue@sff.or.jp

弘化四年に発生した善光寺地震は多くの土砂災害を発生させている。このうち特に甚大な被害を発生させたものに、岩倉山の崩壊による犀川のせき止め湖決壊洪水がある。これらの災害に関する古記録は豊富で、既往の研究が精力的に実施されているが、煤花（裾花）川のせき止め湖決壊災害に焦点を絞った研究は少ない。本研究は、河川災害史研究の見地より、地震後に発生した土砂災害とその後、明治初期までの間の河川災害と川除け普請について時系列的に俯瞰し、善光寺地震と煤花川河川改修の関わりを論述する。下流域左岸の文政期御普請堤は壊滅的な被害を受けたが、20年余の歳月をかけ二線堤構造が復旧された。

Key Words: 善光寺地震、裾花川、真田家文書、せき止め湖、決壊洪水、国役御普請堤、二線堤

1. はじめに

弘化四年三月二十四日夜四ッ時（1847年5月8日午後10時頃）に発生した善光寺地震（ $M=7.4$ ）¹⁾は、北信濃一円に大きな震災を及ぼした。震度7の激震が襲った善光寺町は、善光寺御開帳の時期と重なり、参詣に訪れていた多くの旅人等が震災の犠牲となった。また、震源が浅い内陸直下型の地震であったため、震央部（長野市浅川地域）の西方に広がる犀川丘陵地域に大きな土砂災害を発生させた。地震発生後20日目に決壊した犀川の岩倉山（虚空蔵山）せき止め湖の洪水災害は特に甚大で、記録が残る歴史地震の中で最大のせき止め湖決壊災害を犀川・千曲川下流域に発生させている²⁾。（図-1参照）

善光寺地震に関しては、松代藩真田家文書を中心に公的記録が豊富に残されたことに加え、刷り物、紀行文等の見聞録が多数存在し、その実態をかなり詳細に知ることができる。これらの史料の解説や取りまとめは、古くから多角的に進められていて³⁾、土砂災害を含め多くの研究成果⁴⁾がある。

既往研究⁵⁾では、長野市街地西方を流域とする一級河川裾花川（以後当時の記述に従い煤花川という）の河川改修史に関する研究を体系的に実施してきた。ここで、煤花川流域においても地震により河川のせき止め災害が発生していて、煤花川河川改修史においても善光寺地震が重要な意味を有している。しかし、前述の犀川岩倉山

のせき止め湖決壊による氾濫があまりにも甚大であったことから、煤花川のせき止め湖決壊による洪水災害の実態は史料のなかに埋もれ、地元においてもあまり知られていない。

本研究では、各所に散在する史料と既往の研究資料の中から、煤花川の土砂災害とその後の川除け対応に焦点をあて時系列的に俯瞰してゆく。そのなかで、煤花川河川改修史における善光寺地震がもたらした実態を明らかにするものである。

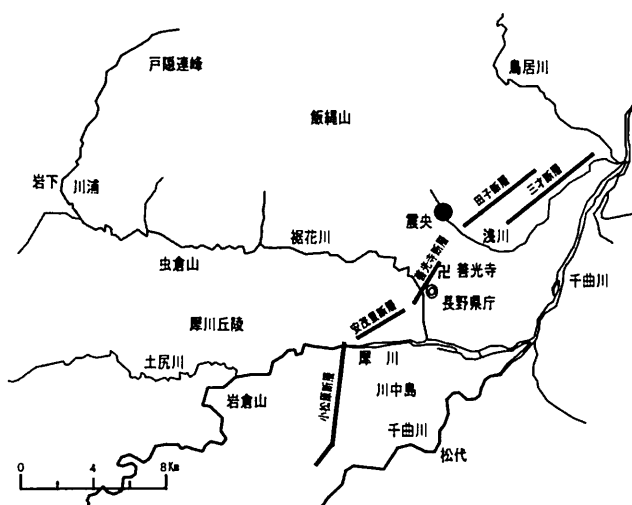


図-1 長野市域と煤花川・犀川・千曲川の関係

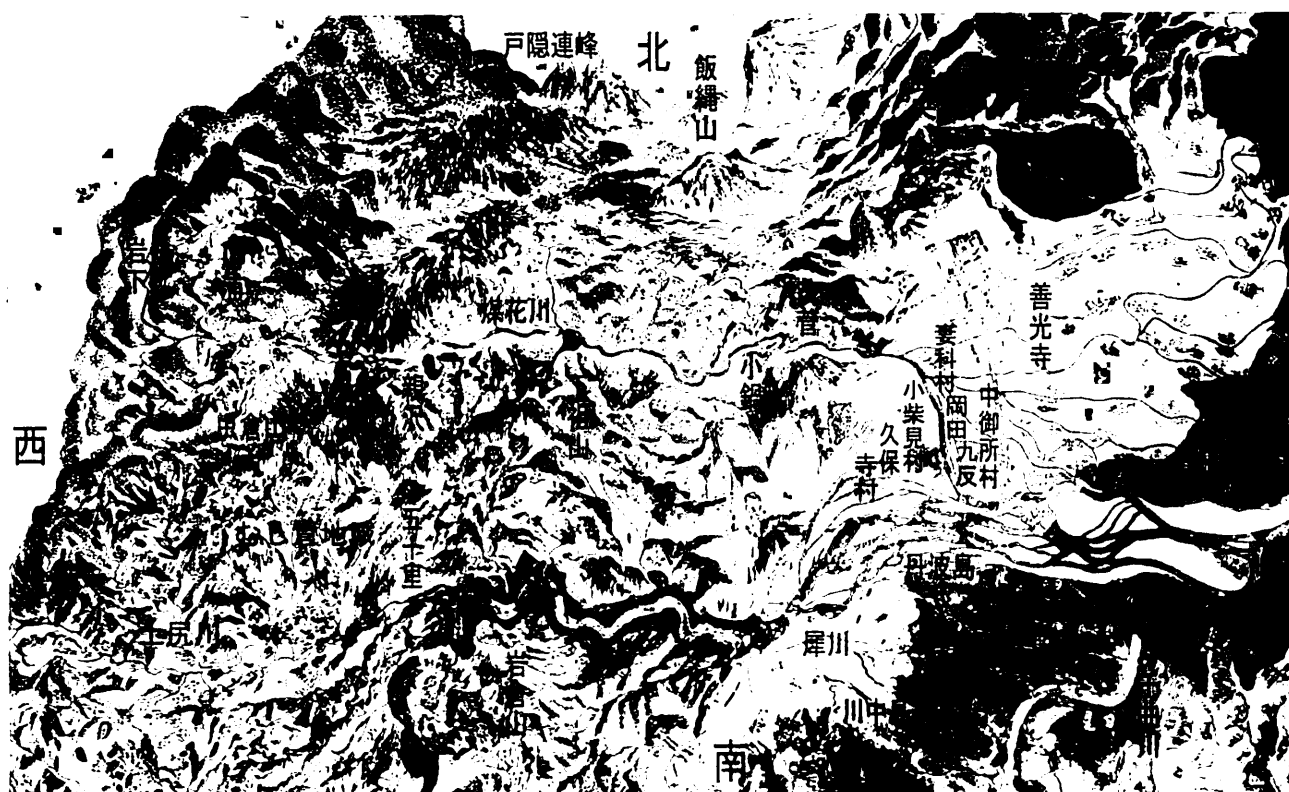


図-2 煤花川流域の土砂災害と犀川のせき止め湖決壊災害の状況を描いた信州地震大絵図⁹⁾の部分図(真田宝物館所蔵)

(真田宝物館写真提供に一部筆者加筆, 方位調整のため原典を左45°回転修正)

2. 善光寺地震における土砂災害の概要

地震発生3ヵ月半後の七月十六日に真田松代藩が幕府へ報告⁶⁾した被災状況によると、「山技崩大小四万五千五百箇所、山技崩堰留水湛大小五拾三箇所(但堀割候分其外共水路相附申候)、往来道筋地震裂坂崩流破延長拾六万四千七百四拾壹間余」とあり、松代藩内のみで4万箇所以上の被害が報告されていて、善光寺地震における土砂災害の大きさが伺える。

善光寺地震は、長野盆地西縁に分布する活断層が1,000年弱の間隔で繰り返す地震の1つとされ、断層を境に西側の山地部は隆起し、東側の盆地部は沈降しているとされる。佃⁷⁾は、この相対変位量を1,000年間で3mとしている。弘化四年の地震では、長野市街地西部の山地部の揺れが大きく、特に犀川丘陵地域で土砂災害が多発した。

この震災の状況を表したものに、信州地震大絵図⁹⁾がある。この大絵図は、震災後松代藩が作製した縦1.9m、横4.2mの災害絵図であるが、松代藩領を中心に飯山藩、須坂藩、松本藩、善光寺領および幕府領等広範囲の地域の火災、土砂災害ならびに水害の発生状況を詳細に描いている。

図-2には信州地震大絵図のうち、一級河川信濃川水系に属する、犀川末流部および土尻川、煤花川流域の部分図を示した。地震直後に発生した家屋倒壊と火災で

2,486人⁹⁾が死亡した善光寺領の延焼部分が朱で塗られている。夥しい土砂崩れ・地滑りの被災箇所が赤茶色で、せき止め湖決壊で発生した洪水被災地はこげ茶色で表示されている。

図-2下端中央やや左側には、善光寺地震最大の土砂災害である岩倉山の崩落により生じた犀川せき止め湖が描かれている。このせき止め湖の湛水規模に関しては種々の既往研究がある。たとえば、井上¹⁰⁾は推定移動土砂量8,400万m³、最大湛水水深65m、推定湛水量3.5億m³としている。また山浦¹¹⁾は、推定移動土砂量3,000~4,000万m³とし、寺沢¹²⁾の推定をもとに湛水延長約23.35km、最大湛水水深70m、推定湛水量2~3億m³としている。このせき止め湖は、地震発生後20日目の四月十三日に決壊し下流の犀川・千曲川流域に大洪水を発生させた。

この岩倉山せき止め湖下流で犀川に合流する土尻川も、その流域で多数の土砂災害を発生させている。この中に、激震地虫倉山(図-2中段左側)が存在する。虫倉山は標高1,378mで、南麓には大峰面群とよばれる海成の隆起準平原が広がっている。大峰面群が分布する地盤の下部の山体は第三紀層の砂岩、泥岩層で構成され慢性的な地すべり発生地帯となっている¹³⁾。

土尻川では、五十里でせき止めが発生し、湛水長120~140m、最大湛水水深23mの河道閉塞が起きたが、地震発生後17日目の四月十日に決壊をしている¹⁴⁾。

表-1 弘化四年善光寺地震発生後の煤花川災害実況

年	月	日	記事	史料名	出典
弘化四年 丁未年（1847年）	三	廿四	夜四ツ時（午後10時）善光寺地震発生M7.4	新編日本被害地震総覧[増補改訂版] ¹⁾	
			岩倉山大崩壊で犀川せき止め発生	河原綱徳著むし倉日記 ¹⁷⁾	むし倉日記 信濃教育会編
			土尻川五十里でせき止め発生		
			煤花川鬼無里村川浦、親沢、下祖山村菖蒲沢、小鍋村、茂菅村でせき止め発		
	廿五		茂菅村のせき止め当日決通、菖蒲沢半日で決通		
	廿八		朝卯の刻煤花川小鍋村せき止め欠通	六川御役所御用米売上 ¹⁸⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ二
	四	十	土尻川、五十里でせき止め湖決壊（一丈以上の鉄砲水）	真田家文書 ¹⁴⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ一
		十三	犀川岩倉山堰き止め湖決壊、鉄砲水大水害		
	五	廿八	川浦せき止め見聞（未松代より御検分も無御座由） 長サ二十五町程、横巾三町程、深サ三丈程、水中家九軒	芦澤不朽著帰郷日記 ²⁰⁾	長野郷土史研究会 古文書講習会資料
			松代藩道橋方、川浦せき止め御検分		
	六	三	水嵩川上江二拾町川幅四町深サ十八丈程水湛	地震災害測量絵図 ²²⁾	長野市鬼無里民族 ふるさと資料館所蔵
		七	第12回目幕府報告 沢之湛留御届	真田家文書 ¹⁹⁾	
	七	廿	夕方川浦塞き止湖決壊・煤花川大洪水 堰留候場所幅拾五間余深サ四丈程押破大水一時二押出 久保寺村并中御所村地内国役御普請所手限普請所川除土堤石積等数多押 流、同村之内岡田組江掛り切川二相成	真田家文書 ²³⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ一
			山抜二而地震節煤花河湛水留水仕候常水凡壺丈余出水	妻科村齊藤家文書 ³⁰⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ二
		廿七	煤花川出水の儀付郡奉行紙紙之通申聞候御届之儀 宣御取計可被成候（三家老）小山田峯岐様・望月主水様	真田家文書 ²³⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ一
		廿九	煤花川出水先御届		
			中御所村煤花川出水御検分願	中御所村文書 ²⁴⁾	長野市誌編集収集史料
	八	二	御本文之趣致承知候、恩田頼母 御用番様	真田家文書 ²³⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ一
		六	先御届候 評議 御同意存候 峯岐 主水様 煤花煤鼻之事 煤花の表記を煤鼻に差し替えにつき勘弁願う 災害第一報御届書御用番戸山城守様へ持参御取次差出		
		七	煤花川洪水先御届之儀別紙之通評議取計申候		
		九	災害第二報阿部伊勢守様へ御取次面会、被成御落手候		
		十八	普請のため勘定方、丹波島着	真田家文書 ²⁵⁾	
		十九	勘定方、煤花川川除普請の場十九日見分丁張		
	九	十二	先月廿日右閣留之場所押切、居家五軒引水二罷成、相残り四軒並二御高辻之 内多分、今以水中二罷成居候処	鬼無里村文書 ³¹⁾	鬼無里村史
		十八	先達而中御見分之上、御掘割御積立被二成下置、難有仕合奉存候、人足千 七百六拾四人、金拾七両貳分八匁四分		
	十	廿九	御勝手方阿部伊勢守様ヨリ御留守居老人御呼出申来候 其方領分煤鼻川通堤川除破損所此度限願之通御普請被	真田家文書 ²⁶⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ一
			煤花川堤川除破損所、此度限御普請御願之通、御目付演説	真田家文書 ²⁹⁾	
	十一	廿九	被災詳細報告幕府提出 御届書御用番青山下野守様御勝手御懇阿部伊勢守様江持参差出	真田家文書 ²⁷⁾	人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵
			犀川川除普請入用藤代金請取証文綴 藤代金請取証文（い1502） （金四六両余、久保寺村、小柴見、中御所他分）布野村瀬左衛門		
			犀川・煤花川川除普請入用材木代金請取証文綴（く1375） 材木買上代金請取証文久保寺村民弥（銀三二二匁余、煤花川除普請分） 材木買上代金請取証文小柴見村三役人（銀一貫余、煤花川除普請分） 材木買上代金請取証文中御所村三役人（銀二貫余、煤花川除普請分）		
			弘化四年堤川除普請諸色代金・人足賃金請取証文綴（く1582） 煤花川通石積・委牛立込人足賃金請取証文久保寺村名主（金四両余） 材木藤縄代・人足賃金請取証文小柴見村三役人（金五六両余） 諸色代金・人足賃金請取証文中御所村三役人（金二二二両余）		
	十二		大地震犀川煤花川大破国役御普請人足諸入用取調帳	栗田村文書 ²⁸⁾	近世栗田村古文書集成
			国役普請完了、弘化四年中の普請の金高は壺万四千両也	真田家文書 ²⁵⁾	新収日本地震史料 第五巻別巻六ノ一

3. 善光寺地震における煤花川流域の災害

虫倉山の北側山麓を煤花川が東流している。煤花川は、戸隠連峰高妻山を源とする、延長50km、流域面積280km²の一般河川である。流末部は長野市街地西方を南流して丹波島地先で犀川に合流している。

この煤花川流域では、日影村岩下（鬼無里村川浦）、鬼無里村親沢、下祖山村菖蒲沢、小鍋村および茂菅村（何れも現在は長野市）でせき止め災害が発生した¹⁵⁾。

以下、表-1に示した善光寺地震発生後弘化四年末までの煤花川災害の実況を俯瞰する。

親沢は虫倉山北山麓の地で、土石流が発生し煤花川を

埋塞したものである。土石流の流下長1.5km¹⁶⁾下り瀬、落合の集落を巻き込んだようであるが詳細は不明である。下祖山村菖蒲沢のせき止めについては、当時松代藩の家老であった河原綱徳が記した「むし倉日記」¹⁷⁾に次のようにある。「同村の内ヤハズ山技覆菖蒲澤へ押出し、煤花川迄崩落候処、高サ凡二十丁程も可有之相見へ、家数十三軒程押埋、家内絶切候家四軒程御座候旨、樂貞院と申寺一ヶ寺埋、大木大石等押下し候へ共、田畑損所ハ僅ニ御座候、此処ニて煤花川押留、川向ハ神領下ニレ木村と申小村ニて、押埋候家も有之由、半日程堰留候へ共、押破り、川筋差支無御座候様子ニ御座候」

同じく「むし倉日記」では、茂菅村の状況を以下に記

している。

「善光寺領朝日山拔所甚多、岩石も拔落候へ共、煤花川迄拔落堰留候迄ハ無御座候、茂菅より小鍋村道筋往來の橋の方より山拔、煤花川堰留、一旦水湛候処、村方より人夫出し不日に掘割候故、川上ニ格別水難無之相済候旨。尤右川中へ拔落掘割場所ハ、川形十二三間程幅四五間程高二丈餘の由、一村のミの人数ニテ掘割候故骨折候由」

これらより、下祖山のせき止めは半日、茂菅村はせき止め無で、小鍋村が不日となっている。実際には地震発生後5日目の三月廿八日朝に決通している¹⁹⁾。

煤花川最大の土砂災害は、日影村岩下（対岸が鬼無里村川浦）のせき止め災害である。湛水規模は、「水嵩川上江二拾町（2000m）川幅四町（400m）深サ十八丈（54m）程」¹⁹⁾で地震発生後15日目の七月廿日夕に決壊し、下流の13ヶ村に大きな被害を出している。

先に発生した犀川岩倉山の大災害の対応に迫られた松代藩は、岩下のせき止めに関しては対応が遅れていたようである。五月廿八日に岩下を見分した芦澤不朽²⁰⁾は帰郷日記に以下のように記している。

「一、川浦村より松代へ御届書之由左之通、長サ二十五町程、横巾三町程、深サ三丈程、水中家九間、右湛水の中ニ家根四五軒見え候、未松代より御見分も無御座よし、此先ニも右様ニ拔落水湛候処数ヶ所有之候由にて、一同ニ押切候ハバ七里程谷下善光寺のツマナシという処へ押出さんとて、川下より折々見届ニ參候由、此処ハ谷の西方巖石一同ニ拔落、谷川を押埋め、其東の方岸低き処瀆になり通水付居候間、押切体更に無之、右水中九軒の人一人も不出由」

ここにツマナシとは、妻科村の通称で現在の長野県庁が位置する村のことである。下流の妻科村の人々が心配し様子を見届けに来ていたことがわかる。そしてこの時には、既に埋塞部の東側に流ができて越水が生じていたようである。

六月三日には、ようやく松代藩の御勘定役馬場忠吾、道橋御元中沢義市、御立合倉田介九郎、其外御手附衆が岩下に派遣された²¹⁾。その時の検分絵図が図-3に示した「地震災害測量絵図²²⁾」である。これに基づき、六月七日に松代藩より幕府に第12回目の災害報告「沢之湛留御届」¹⁹⁾が提出されている。

七月十四日から降り続いた長雨により廿日夕、岩下のせき止め湖はついに決壊した。松代藩より、煤花川氾濫について以下に示す七月廿九日付の第一報²³⁾が、八月六日に幕府に提出されている。

「私領分信州水内郡煤鼻川上日影村之内宇岩下組地内地震ニ追々拔崩、右川筋三町程押埋、川幅四町程川上江武拾町程の間水嵩拾八丈程湛水ニ相成居候段先達而御届申上置候処、去十四日ヨリ雨天打続十九日頗之大雨洪水

ニ而廿日夕右堰留候場所幅拾五間余深サ四丈程押破大水一時ニ押出、川下数箇村田畑押流或石砂泥入其外山崩川欠等之損地夥敷出来、殊ニ同郡久保寺村并中御所村地内国役御普請所手取普請所川除土堤石積等数多押流、同村之内岡田組江掛り切川ニ相成、耕地江川筋相立北国往還江押出通路差支候程之儀ニ付民家石砂泥水入数多有之、尤右押破候場所追々欠崩候様子ニ而水勢未難見極旨訴出候、委細之儀は追而可申上候得共先此段御届上候」

また、六日には松代藩内で第二報に関する評議が行われている。その記録の中に「煤鼻煤花之事」²⁴⁾と題する記録があり、煤花川の表記を煤鼻川と訂正する旨の指示応答の経過が残されていて興味深い。その結果、煤鼻川の表記を用いることとして国役普請による救済を求めている。間もなく、川除け普請のため幕府より勘定方が八月十八日丹波島に到着し、翌十九日には煤花川川除普請の場にて見分丁張が実施された²⁵⁾。つづいて幕府は、九月十二日に国役普請による川除け普請採択を決定し、勝手方阿部伊勢守より松代藩に伝えられた²⁶⁾。

「其方領分煤鼻川通堤川除破損所此度限願之通御普請被」

これにより、煤花川末流部右岸の小柴見村、久保寺村および左岸の中御所村岡田組、九反組で国役普請が実施されている²⁷⁾。これには近隣の栗田村等からも多くの人足が徴庸されている。栗田村²⁸⁾は、煤花川除け普請の内廿間（36m）六拾五坪（215m²）を担当したが、坪当たり4人掛りで五匁六分の費用が必要なところ、四匁五分九厘しかもらえず、匁匁を村で負担したようである。

十月廿九日には、松代藩より詳細な被災報告が幕府になされた²⁹⁾（表-2）。そして、復旧費用14,000両を費やし十二月に弘化四年の国役普請が竣工している³⁰⁾。

4. 日影村岩下のせき止め湖とその決壊

長野市鬼無里民族ふるさと資料館所蔵の「地震災害測量絵図²²⁾」には、善光寺地震によって生じた日影村岩下の山崩れによってせき止められた煤花川の姿が詳細かつ正確に描かれている。これを図-3に示した。

絵図は煤花川を中心に右岸に日影村、左岸に鬼無里村が画かれている。日影村側中央よりやや下にアサラクボとされた位置に水湛と記された入江状の湛水湖の一部が示されている。この西側の斜面が三百間(540m)に渡り崩落し煤花川をせき止めた。このアサラクボとは日影村宇麻草久保である。

一方、図-4に示す2万5千分の一の地形図を見ると、根上の集落よりおよそ1km上流の位置に標高約800mの等高線で囲まれた窪地が画かれている。これが弘化の善光寺地震で出来たせき止め湖のなごりであり、麻草久保の地である。この下流側の標高より、崩積土の頂部の高さは

標高800mと同定できる。

この絵図が画かれたのは六月三日で地震の2ヵ月半後である。絵図には前述の芦澤不朽の帰郷日記にも記載があった東側の滝を意味すると思われる「水出口幅三間

(5.4m) 程」の記述があり、このころにはせき止め湖も満杯となりオーバーフローしていたことが読み取れる。これに伴いせき止め湖の水位も一丈(3m)程低下したものと推定すると、水面高は標高797mを得る。



図3 地震災害測量図²²⁾ 鬼無里ふるさと資料館所蔵

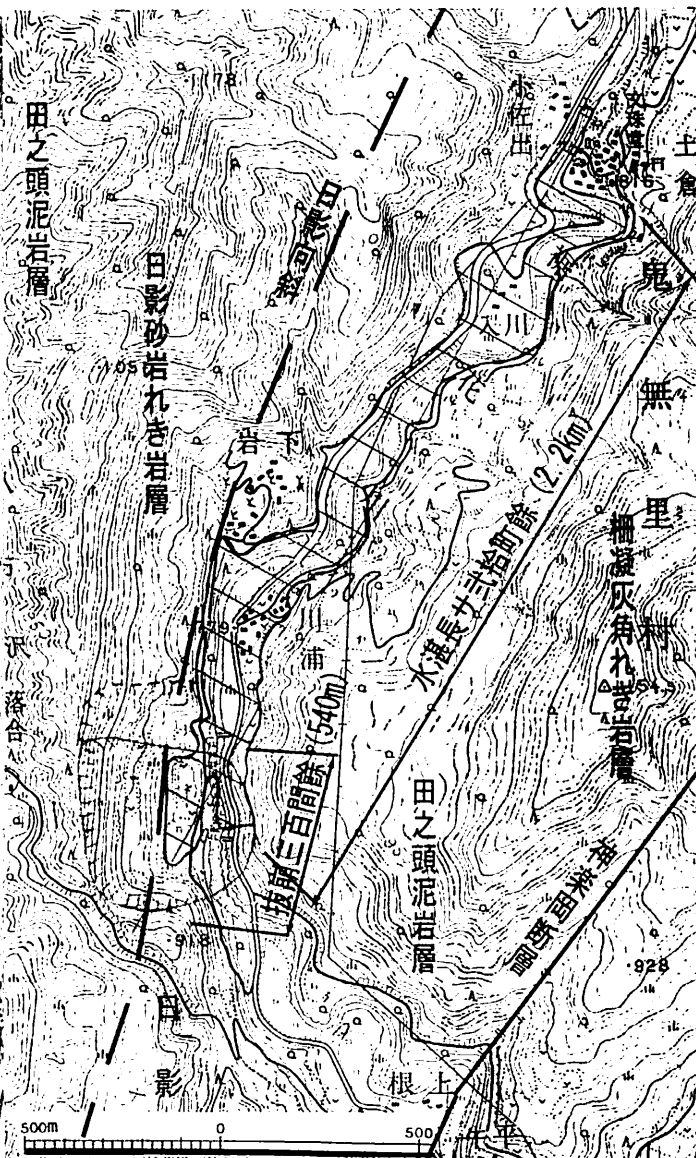


図4 2万5千分の一の地形図に再現した河道閉塞と湛水範囲
(2013年筆者作製)



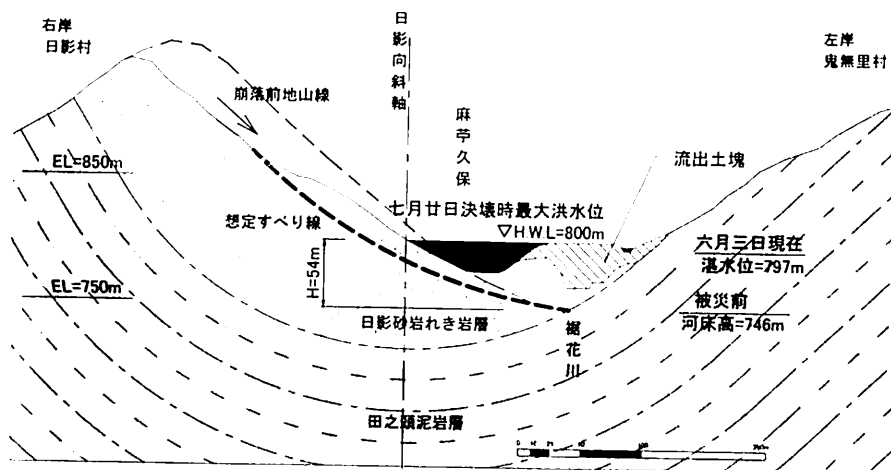
図5 1/2,500の地形図に再現した麻芋久保



写真-1 現在の麻芋久保の窪地 下流(下ノ抜口)より上流側を望む

付近の大規模崩落と河道閉塞(長野市平18関公第31号に一部筆者加筆)

(2013年筆者撮影)



次に、図-4の地形図上に推定最大水位800mの等高線で囲った範囲を見ると、これは絵図に描かれた湛水範囲と見事に一致する。

まず、右岸の岩下集落の下流側に示された沢筋による入江の存在、岩下集落と湛水湖との間に存在する微高地、入川村の水際の位置等が一致する。左岸の川浦村は、4軒を残し9軒が水没したという古記録¹⁰⁾と一致する。そして、せき止めの最上流は土倉村付近であることが判る。

七月廿日の決壊時の最大水位を標高800mと同定したせき止め湖の規模を、2万5千分の一の地形図で判読すると以下の通りとなる。面積 $A=31\text{万m}^2$ 、長さ $L=2.2\text{km}$ （貳拾町）、幅 $W=180\text{m}$ 、最大深さ $H=54\text{m}$ （拾八丈）、これより推定される湛水量は概ね $V=560\text{万m}^3$ を得る。既往の研究¹⁰⁾では、これを湛水面積 98万m^2 、湛水量 1600万m^3 としているが、河道閉塞の位置を誤認していたようである。

このせき止め位置の3.8km上流に奥裾花ダムが昭和154年に完成した。その貯水規模は、堤高59m、貯水高54m、総貯水容量540万 m^3 で、弘化四年善光寺地震の時にはこれに匹敵する湛水湖が出現したことになる。

七月廿日の決壊は、前述した七月廿九日付の幕府報告にあるとおり「幅拾五間(27m)余深サ四丈(12m)程押破」で、上記拾八丈(54m)の湛水の全てが一時に洪水となって下流に押出された訳ではなかったようで、河道を閉塞した土砂の多くが残った状態にあった。

このようなことが幸いし、決壊後の洪水段波のピーク流量は、犀川岩倉山せき止め湖の場合と異なり比較的少なく、下流域の壊滅的な被災を免れたものと考えられる。下流の扇状地の扇頂部に位置する妻科村における洪水段波の水位は「常水凡壹丈（3m）余出水」と報告³⁰⁾されている。

一方、せき止め跡地は「先月廿日右閑留之場所押切、居家五軒引水ニ罷成、相残り四軒並ニ御高辻之内多分、今以水中ニ罷成居候処、先達而中御見分之上、御割割御成立被ニ成下置、雖有仕合奉存候」という状況で、鬼無

里村が埋塞部の開鑿に人足千七百六人、金拾七兩貳分銀八匁四分が必要と見積もり、松代藩に救済を求めた³¹⁾。

図-2の日影村岩下には、土砂崩れが3ヶ所画かれている。麻苧久保で2ヶ所、岩下の集落上流で1ヶ所である。図-3では、麻苧久保の抜け所の記載に「上ノ抜口より下ノ抜口迄三百間（540m）餘」とあり、麻苧久保の上流と下流の2ヶ所で山崩れが発生していたこと

がわかる。

図-5に、2千5百分の一の地形図に再現した麻苧久保付近の大規模崩落と河道閉塞の拡大図を示す。麻苧久保の入り江湖は $L=200\text{m}$ 、 $W=120\text{m}$ 、 $H=25\text{m}$ の規模で面積が $A=20,000\text{m}^2$ である。このような入江状の湛水湖が形成された理由は、先に「下ノ抜口」が崩落した後に「上ノ抜口」が崩落し、湛水湖に狭さく部ができたのではないかと推定している。

この跡地は図-6の断面図に示すように、現在もすり鉢状の窪地となっていて隣接道路との比高は12mである(写真-1)。これが現在も池にならないということは、湖底跡付近の透水性がかなり高く湛水当時もかなりの漏水があったものと考えられる。図-3の災害絵図では河道閉塞土塊の下流から幾筋もの湧水が出ていることが画かれていて、重要な情報を網羅的に画いた工学的にも貴重な絵図と言える。

5. せき止め湖決壊による煤花川の災害と復旧

表-2には、煤花川のせき止め湖に関する諸データと洪水による被災の概要をまとめた。また、参考として約3カ月前に決壊した犀川岩倉山のせき止め災害のものを併記し、両者の規模の比を求めてみた。これより、煤花川および犀川の洪水被害の特徴を以下にまとめた。

(1)湛水規模に関して

a. せき止め土砂量 V_1 に比した湛水量 V_2 は、煤花川が3倍弱で犀川が17倍強となっていて、その比率は犀川が煤花の6倍程度となっている。

b. 決壊に至るまでの湛水継続時間は、煤花が犀川の約6倍となる。

c. つまり、 V_2/V_1 の違いが湛水継続時間の違いとして表れている。

d. 扇頂部の洪水水深は、煤花川が犀川の1/6となっていて洪水段波のエネルギーは比較的少なかった。

表-2 弘化四年善光寺地震における煤花川と犀川のせき止め湖決壊災害の比較

被災項目		煤花川（岩下・川浦）※1	犀川（岩倉山）※2	比（煤花川／犀川）
せき止め湖決壊アータ	せき止め湖決壊日	七月廿日夕	四月十三日午後4時	—
	せき止め時間	984万秒	162万秒	6/1
	推定せき止め土量 V ₁	200万m ³	2,100万m ³ ※3	1/10
	推定最大湛水量 V ₂	560万m ³	たとえば35,000万m ³ ※3	1/63
	湛水延長	2.2km	23.35km	1/11
	湛水深さ	54m（流出分は12m）	70m	1/1.3(1/6)
	扇頂部洪水嵩高	3m	20m	1/6.7
	湛水部平均河床勾配	1/40	1/330	8/1
	扇頂部計画高水流量（現在）	600m ³	4,000m ³	1/6.7
	氾濫原平均河床勾配（現在）	1/140（白岩より丹波島）	1/450（犀川部分のみ）	3.2/1
洪水被災概要	幕府宛被害報告日	十月廿九日	七月九日	—
	被災村数	十三ヶ村	八拾ヶ村	1/6
	損耗高	四千七百八拾石余	三万八千八百四拾石余	1/8
	内 田	三千百八拾石余	貳万七千九百拾三石余	1/9
	畑	千六百石余	壹万九百貳拾七石余	1/7
	民家流失	壹軒	貳千四百七拾壹軒	1/2,470
	民家石砂泥水入	貳拾五軒	貳千五百七拾軒	1/100
	水車家水入	拾ヶ所	貳百九拾八棟	1/30
	土蔵水入	八棟	四拾棟	1/5
	川除石積上切押流共	千貳百七拾間余	貳千九百八拾間	1/2.3
	内 国役御普請所	六百七拾間余	八拾間	8.4/1
	川除土堤押流	千七百五拾間余	貳万七千三百三間	1/16
	内 国役御普請所	貳百五拾間余	貳千九百四拾七間	1/12
	川除岸側押流	拾六ヶ所	四百七拾七ヶ所	1/30
	内 国役御普請所	拾壹ヶ所	—	—
	菱牛石積流失	—	三百八ヶ所	—
	石枠合掌枠流失	—	千貳百三拾六組	—
	岸囲打杭笈牛差出流失	—	八千四百四拾五間	—
	用水堰押埋延長	貳百七拾八間余	三万四千四百八拾貳間	1/113
	大小橋流損	九ヶ所	貳百六拾ヶ所	1/29
	大小橋破損	—	百八拾壹ヶ所	—
	往来道形水破	四百八拾間余	三万三千四百八拾九間	1/70
	流死	無御座候	貳拾貳人	—
	死牛馬	無御座候	貳百三拾壹疋	—

ここに※1は、真田家文書 御参府御在府日記（十月廿九日） 真田宝物館所蔵²⁹⁾

※2は、真田家文書 御参府御在府日記（七月拾六日） 真田宝物館所蔵³⁰⁾ ※3は、地震地すべり¹⁰⁾

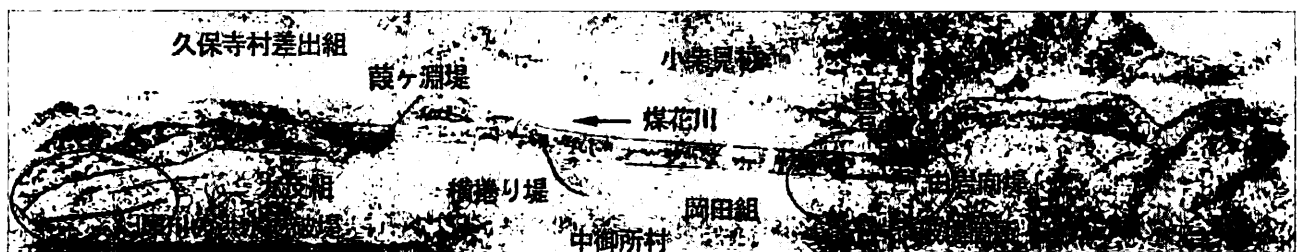


図-7 嘉永五年煤鼻川妻科村分地龍王ヨリ犀川落合久保寺村ノ内米村迄絵図面³⁰⁾（長野市立博物館所蔵浦野家文書）2009年筆者撮影

(2) 氾濫被害に関して

- 被災村数および損耗高よりみて、洪水の面的な被災の実態は煤花川が犀川の1/6～1/8の規模にある。
- 煤花川の民家流出は極端に少なく氾濫水の水深は比較的浅かった。面的な被災比と湛水量の比は10倍強となっていて、単純計算すると氾濫水深も10倍程度の違いがあったと推定できる。
- 田用水路の被災は犀川が圧倒的に多く、平坦地で用水路の利活度が大きかった土地利用形態を反映している。

- 橋および道路等の交通施設の被災は、煤花川が比較的軽微であった。これは、上記b.と同じ要因が考えられる。

(3) 河川施設の被害に関して

河川施設の被害は、煤花川の石堤被害が比較的大きく、土堤の被害が少ない。これは被災氾濫原を流れる河川の河床勾配に起因した築堤構造の違いを反映したものと考えられる。末流部の延長が3km（左右岸合計で6km）程度の煤花川で、石堤流出が千貳百七拾間（2.3km）であることから、延長の約4割弱の石堤が被災していたと判

断できる。特に煤花川の石堤被害の半分は、過去に国役普請によって造られた石堤の被災であった。それに対して、犀川には、国役普請による石堤はほとんど存在しなかったようである。

図-7には被災5年後に書かれた御普請所絵図³²⁾を示す。これは嘉永五年（1852年）に松代藩道橋奉行方が作製した犀川絵図と対をなす煤花川の絵図で、犀川絵図の凡例には、黒色が末年（1847年）御普請堤、茶色が古御普請堤、朱色が申年（1848年）より御手普請と記されている。御普請堤とは、国役金で作られた幕府直轄の川除け堤で、御手普請とは松代藩による川除け堤のことである。ここに古御普請堤とは文政期（1819～1829年）に実施された国役普請を意味している（図-9参照）。

現在、茶色部分が不鮮明で黒色との識別が難しいところがあるが、中御所村岡田組の白岩向堤と称される部分が弘化四（未）年の国役普請として復旧されていたことがわかる。文政期の川除け普請では、岡田組地先の白岩向堤から横捲り堤までの間に控堤が築かれ二線堤構造が完成した⁹⁾が、この時期にはまだ控堤の復旧に至っていない。また、犀川合流部の九反組下流部もこの年の国役普請であるが、これは犀川の氾濫によるものである。

真田家文書「犀川煤花川筋村々御普請仕立御入料メ出」³³⁾によると、嘉永二年～四年の御手普請の費用は、久保寺村が金九百六拾三両三分銀五匁七歩、中御所村岡田組が、金三百三拾九両三分銀拾四匁壹厘、で中御所村九反組が、金百九拾九両貳分銀三匁三歩貳厘となっている。ただし、久保寺村分には犀川分も含まれている。

6. 善光寺地震以後の江戸時代末期の煤花川除け

地震により荒廃した山地は現在のように計画的に整備されることは無かったため、震災後は洪水による災害が頻繁に発生している。善光寺地震以降明治初年までの間に煤花川で発生した洪水を表-3に示した。

これによると3年を下回る間隔で洪水が発生している。災被個所の大部分は左岸中御所村の岡田組と九反組で、決壊を繰り返している。右岸の久保寺村は、葎ヶ淵堤と

その下流の一之口堤（差出組）が被災しているが限定的であった。この期間の最大級の災害は、慶応元年閏五月と二年五月(1865～1866年)に連続して発生した大洪水であった。六月十日には、幕府により国役普請が採択され、再び国役による川除け普請が実施されている。

表-4には、各所に保存されている古文書の中で、嘉永元年から明治初期における煤花川除けに関連する文書を列記した。やはり慶応兩年の災害以降の史料が多い。ここで注目したいのは、煤花川左岸域に位置する栗田村、千田村、風間村等の慶応期の文書である。元年には災害による窮状を訴える文書が出されている。翌二年五月には左岸地域の村々（文書ではこれを押下村々と称している）より、御用水煤花川組合が管轄する左岸横捲り堤と右岸久保寺村の葎ヶ淵堤との間の川幅が狭く、洪水流下に差支えがあるとして用水組合の惣代に拡幅を願い出ている⁴⁰⁾。（図-8参照）

また、同年十一月には、2年連続で決壊した中御所村岡田組地先の白岩向堤の背後に、新規に控堤（押下堤）横巾7間長200間の大土堤を築堤するために、敷地の永久借地料として金五拾両（趣意金）を地元の中御所村に支払うとする文書⁴¹⁾が出されている。この時、栗田・千田・七瀬・妻科・南俣の5ヶ村からなる御用水煤花川組合に、東風間村および西風間村が加わり、7ヶ村で構成する用水組合となった。しかし地元の中御所村はこの組合に参加していない。

図-8には、慶応期の大洪水の後の煤花川除普請所を表した絵図⁴²⁾を示す。図下段右側には、左岸中御所村岡田組の川除け堤が、左側には九反組の川除け堤が画かれている。このうち、白岩向（172間312m）・中丁場（246間447m）・長淵～亀の甲（412間749m）の各堤が第1線堤である。横捲り堤（294間535m）は霞堤で、押下（196間356m）・控（161間293m）の各堤が第2線堤である。また図の上段左側には、右岸久保寺村の葎ヶ淵堤と一之口堤が位置していた。

前述の御用水煤花川組合が作った第2線堤が、図-8下段右端の押下堤である。川表の白石向、中丁場の各堤は国役普請で築堤されている。ここに慶応三年十月に事件が発生した。その時に松代藩の郡奉行および道橋奉行に

表-3 弘化四年善光寺地震以降明治初年までの煤花川の洪水記録

年号	年	干支	月	日	西暦	被災箇所	出典
弘化	四	丁未	七	二十	1847	川浦・岩下せき止め湖決壊、中御所村岡田堤破堤	新収日本地震史料第5巻別巻6-1 ²³⁾
安政	元	甲寅	三		1854	久保寺村葎ヶ淵破堤	安茂里史刊行会収集史料 ³⁴⁾
	六	己未	五	十九	1859	中御所村岡田・九反堤決壊、中御所・栗田・七瀬水害	七瀬町史 ³⁵⁾
万延	元	庚申	六	二三	1860	久保寺村葎ヶ淵～一之口破堤	安茂里史刊行会収集史料 ³⁴⁾
文久	二	壬戌	二	二七	1862	煤花大洪水	信濃川百年史 ³⁶⁾
			七	二七		煤花川大洪水	長野県政史別巻 ³⁷⁾
慶応	元	乙丑	閏五	二七	1865	煤花川大水害、七瀬・栗田・南俣被害甚大	近世栗田村古文書集成 ²⁸⁾ 七瀬町史 ³⁵⁾
	二	丙寅	五	十五	1866	中御所村岡田堤欠壊、中御所・栗田・千田・七瀬被害大	豪農大鈴木家文書 ³⁸⁾
明治	元	戊辰	五		1868	煤花川出水、中御所村九反堤決壊	真田家文書(国文学研究資料館) ³⁹⁾

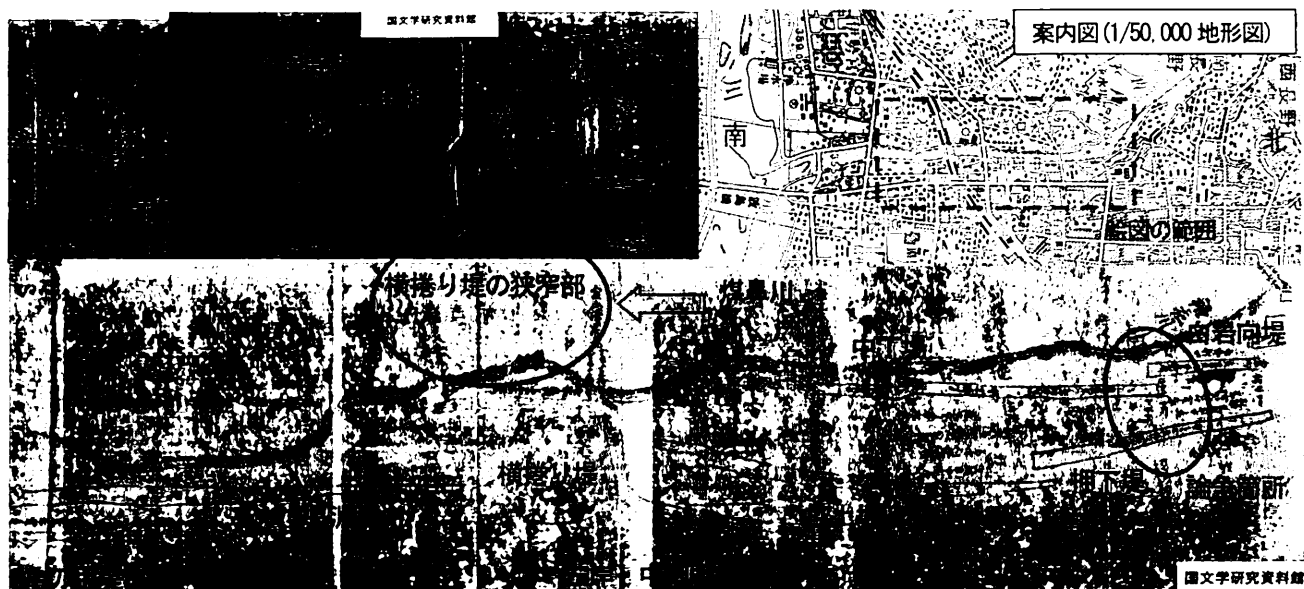


図-8 慶応期の洪水に対する明治4年堤川除普請絵所図⁴³⁾ (人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵真田家文書) 2006年筆者撮影

提出された訴状が「千田村等四ヶ村煤花川中御所村新土堤切払い願ひ」⁴³⁾である。その全文を巻末の補遺に示す。

これは、第1線堤である白岩向堤と中丁場堤の不連続部分に、長貳拾間 (36m) 余横五間 (9m) 余の矢之羽堤と称する河道に対して斜めの堤防を、御用水煤花川組合が築堤した第2線堤である押下堤との間に、中御所村が無断で築堤したことによる争いである (図-8中に楕円で示した論争箇所参照)。これは、下流の新田 (文政期以降のもの) を洪水から守ろうとするもので、秋の農繁期で用水組合の目が届かぬうちに中御所村が強行したものであった。この矢之羽堤は、図-9に示した文政期の御普請絵図⁴⁴⁾で存在が確認できる。よって、善光寺地震の被災前には築堤されていた川除け堤の一つであったことがわかる。中御所村は既得権として矢之羽堤を築堤しようとしたと考えられる。訴状はこの築堤の中止を訴えるものであった。更に、前年に願ひ出た横捲り堤狭さく部の拡幅も今だ以て御沙汰が無いとし、再び出水すると難渋すると訴えている。この訴えに対す

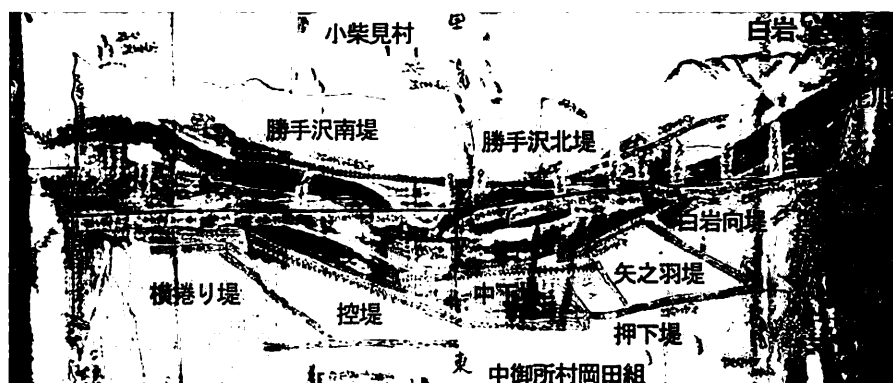


図-9 文政期の煤花川御普請所絵図⁴⁴⁾ 2006年筆者撮影

(川除け堤の名称は江戸時代末期のものを示す)

る松代藩の対応は定かでないが、図-8には矢之羽堤の痕跡はなく無事撤去されたものと思われる。

その後、明治元年にも五月より洪水が発生し中御所村の岡田組と九反組が被災している (表-5参照)。この年の被災は中御所村九反組が大きく、岡田組は僅かであった。このころまでには、煤花川左岸岡田組地先の二線堤構造は完全に復旧していたものと考えられる。

7. まとめ

弘化四年善光寺地震で発生した煤花川の土砂災害についてまとめてみた。その結果明確になった点は以下のとおりである。

- ① 地震後発生した鬼無里日影村のせき止め湖を画いた「地震災害絵図」は精確に被災の状況を記録して、現在の地形と整合する。これより判明した最大湛水面積は、 $A=31$ 万 m^2 で、これより推定される湛水量は概ね $V=560$ 万 m^3 となる。

表-5 辰五月ヨリ犀川煤花川除水破流出分御書上³⁹⁾

被災内容	久保寺村	中御所村	
		岡田組	九反組
堤切所	四百三拾間	拾間	貳百貳拾六間
同欠所	貳百五拾間	—	百六拾間
菱牛立石積	百三拾組	六拾組	七拾五組
大桶杵	—	貳組	—
桶杵	拾貳組	—	—
沈杵	拾五組	八組	八組

表4 嘉永元年から明治初期における煤花川除け関連古文書リスト

年号	年	干支	月	西暦	文書名	史料名	出典
嘉永	元	戊申		1848	真田家文書	犀川煤花川筋村々御普請仕立御入料金ノ出	A
	二	己酉	六月	1849	真田家文書	村々千曲川除御普請出来形御書上目録	A
安政	元	甲寅	三月	1854	久保寺村文書	霞ヶ淵破堤・諸御願書留帳	E
	四	丁巳	十二月	1857	久保寺村文書	久保寺村出入足皆済一紙	E
			五月		村田家文書	小柴見村定例自普請人足御立方極帳	E
	五	戊午	五月	1858	久保寺村文書	久保寺村定例自普請人足御立方極帳	E
			十二月		久保寺村文書	久保寺村出入足皆済一紙	E
			五月十九日		鈴木家文書	煤花川欠壊、岡田・中御所・九反・栗田・七瀬水害	F
	六	己未	十二月	1859	久保寺村文書	久保寺村出入足皆済一紙	E
					久保寺村文書	霞ヶ淵一之口破堤・諸御願書留帳	E
万延	元	庚申	六月	1860	千田村文書	犀川煤花川満水押し難洗につき千田村等5力村新規土堤自普請願	D
			七月五日		宮島家文書	小柴見村御用日記小柴見村勝手沢下流堤川欠壊分願	E
文久	二	壬戌	閏八月	1862	久保田家文書	問御所村水損御手当願	B
慶応			五月	1865	久保田家文書	乍恐以仕訳書奉願上候(煤花川出水問御所村泥砂水につき)	B
	元	乙丑	六月		栗田村文書	乍恐以書付御届申上候(栗田村洪水被害届)	C
			九月		千田村文書	千田村煤花川満水ニ付家数損入書上帳	D
					千田村文書	煤花川押切水損御見聞差上絵図	D
	二	丙寅	五月廿七日	1866	千田村文書	取極申一札之事(千田村等煤花川巾切広嘆願一件栗田村常右衛門等へ惣代依頼)	D
			十一月		風間村文書	差出申一札之事(両風間村煤花川普請新規普請趣意会)	D
			六月十日		真田家文書	幕府老中申渡書(真田家領分七ヶ村国役普請、願いの通り許可の旨)	A
	三	丁卯	二月	1867	宮島家文書	小柴見村御用日記小柴見村自普請所起工願・完成報告	E
明治			十月		千田村文書	千田村他中御所村新土堤切払願	D
	元	戊辰	八月	1868	真田家文書	辰五月中ヨリ犀川煤花川除水破流失之分御書上	A
	二	己巳	十月	1869	真田家文書	裾花川通信州市村中御所村組合御普請願目論見帳	A
			五月		久保寺村文書	久保寺村煤花川除自普請帳	E
	三	庚午	八月	1870	真田家文書	普請内借金請取証文綴(久保寺村・中御所村他)	A
			十月		真田家文書	当道管轄所信州水内郡久保寺村外式ヶ村更科郡川合新田御普請願目論見帳	A
			十二月		久保寺村文書	久保寺村出入足皆済一紙	E
			二月十四日		真田家文書	千曲・犀・煤花三川御普請御入用込取調書 (文政元年より同六年までの入料金書上、年平均二二五両)	A
					真田家文書	普請皆済金請取白紙証文 中御所村・久保寺村他村三役人 (犀川・煤花川通各村内、去年堤川除普請諸色代金、入足賃金)	A
	四	辛未		1871	真田家文書	千曲川通犀川通裾花川通犀川用水堰信州更級郡埴科郡高井郡水内郡村々 川除普請附調帳	A
					真田家文書	長野県公用状(中御所村、当県移管につき当夏仕越普請も当県にて扱うべきとの書面なれど、 貴県にて扱われたく関係書類返信の旨)中御所村普請目論見帳写	A
					真田家文書	犀川千曲川通り諸村普請所龍絵図(中御所村、久保寺村他)	A
					真田家文書	中御所村・久保寺村堤川除普請所絵図	A
			五月		久保寺村文書	久保寺村煤花川除自普請帳	E
	五	壬申	四月	1872	真田家文書	千曲・犀川川除々堰用水普請中借証文綴 煤花川普請金中借証文(金二三両余、中御所村川除普請)	A

※出典は、A:国文学研究資料館所蔵²⁾、B:長野県立歴史館所蔵⁶⁾、C:近世栗田村古文書集成²³⁾、D:長野県編纂収集資料⁴⁾、E:安芸里史刊行会収集資料³⁴⁾。

- ② 煤花川のせき止め湖決壊による洪水被害は、犀川岩倉山せき止め湖の決壊と比較して、おおむね1/10の規模にある。氾濫部河川の河床勾配を反映した護岸構造の違いがあり、犀川に比して煤花川の石堤被災が多い。このうち半数が過去の国役普請で築堤されたものであった。
- ③ 地震後明治初年までの間(約20年)に、流域山地の荒廃により、煤花川は洪水を繰り返した。その発生頻度は1回/3年を上回った。特に、慶長元年および二年には連続した二度の大洪水を発生させていて、再び国役普請が実施された。
- ④ 中御所村岡田組地先の第2線堤は、押下村々(下流域の村々)7ヶ村による用水組合により造られたが、地元中御所村との調整に苦慮した記録が複数存在する。このような農民の苦闘により煤花川左岸の二線堤構造は復旧された。

参考文献

- 1) 宇佐美龍夫:新編日本被害地震総覧[増補改訂版], pp.111-117, 東京大学出版会, 1996.
- 2) たとえば, 震災予防調査会:大日本地震史料, 卷之十三~十六, pp.51-319, 丸善, 1904.
- 3) たとえば, 東京大学地震研究所:新収日本地震史料, 第五巻別巻六ノ一, (社)日本電気協会, 1988
- 4) たとえば, 善光寺地震災害研究グループ(望月巧一, 赤羽貞幸, 山浦直人ほか):善光寺地震と山崩れ, 長野県地質ボーリング業協会, 1994.
- 5) 宮下秀樹:江戸時代初頭における煤鼻(裾花)川の開発形態に関する研究, 土木史研究, Vol.32, pp.95-104, 土木学会, 2013.
- 6) 前掲3, 日記(御在府) pp.351-357
- 7) 佃榮吉, 栗田康夫, 奥村晃史:長野断層系から発生する善光寺型地震の再来間隔と断層変位量の推定, 地震予知連絡会会報, Vol.44, pp.408-414, 地質調査所, 1990.
- 8) 松代文化施設等管理事務所:信州地震大絵図, 真田宝物館所蔵
- 9) 坂口家文書:弘化四丁末年善光寺地震有増記, 長野県史近世史料編第七巻(三), pp.664-666, 長野県史刊行会, 1982.
- 10) 井上公夫:地震地すべり, 付属資料1 歴史地震による

謝辞

地元に残る古文書の解説にあたっては、長野市公文書館西沢安彦先生にご尽力いただきました。ここに御礼申し上げます。

大規模土砂移動カルテ表 No.17-4 および No.17-8, 日本地すべり学会, 2012.

- 11) 山浦直人:善光寺地震と虚空蔵山の崩壊, 第3部第1章5, pp.70-75, 涌池史跡公園記録誌編集委員会, 2011.
- 12) 寺沢章:岩倉山崩壊時の犀川水湛面, 信濃教育, 第六〇四号, pp.34-50, 信濃毎日新聞, 1937.
- 13) 前掲4, 6-1(1), pp.61
- 14) 前掲3, 日記(御在邑), pp.339-342
- 15) 前掲4, 6-1(6), pp.79-84
- 16) 前掲4, 7(3), pp.101-104
- 17) 信濃教育会:河原綱徳稿弘化震災記むし倉日記, 信濃毎日新聞, 1931.
- 18) 東京大学地震研究所:新収日本地震史料, 第五卷別巻六ノ二, pp.876-877, (社)日本電気協会, 1988.
- 19) 前掲3, 日記(御在邑), pp.351
- 20) 小林一郎:芦澤不朽の日記, 古文書講習会テキスト, 長野郷土史研究会, 2013.
- 21) 東松露香:弘化四年善光寺地震(復刻版), pp.181-182, 信濃毎日新聞, 1977.
- 22) 地震災害絵図, 鬼無里民俗ふるさと資料館所蔵
- 23) 前掲3, 御届書并御伺之類, pp.194-196
- 24) 中御所村文書, 長野市公文書館所蔵
- 25) 前掲3, 御願川除御普請仕立中日記 pp.212-213
- 26) 前掲3, 江戸写大地震一件下, pp.166-174
- 27) 史料館:史料館所蔵史料目録第43集, 国文学研究資料館, 1990.
- 28) 青木正義:近世栗田村古文書集成, 銀河書房, 1983.
- 29) 前掲3, 御届書并御伺之類, pp.196-197
- 30) 前掲18, 齊藤武家文書 pp.851-852
- 31) 鬼無里村編集委員会:鬼無里村史, pp.464-468, 鬼無里村, 1996.
- 32) 浦野家文書:嘉永五年煤鼻川妻科村分地龍王ヨリ久保寺村ノ内米村迄絵図面, 長野市立博物館所蔵
- 33) 真田家文書:犀川煤花川筋村々御普請仕立御入料(い1881), 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵
- 34) 安茂里史刊行会収集史料, 長野市安茂里公民館
- 35) 七瀬町史編纂委員会:七瀬町史, 七瀬町公民館, 1984.
- 36) 建設省北陸地方建設局:信濃川百年史, 北陸建設弘済会, 1979.
- 37) 長野県:長野県政史別巻, 長野県, 1972.
- 38) 森安彦:豪農大鈴木家文書, 鈴木陽, 1982.
- 39) 真田家文書:辰五月中ヨリ犀川煤花川除水破流失之分御書上(い1886), 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵
- 40) 上千田小林家文書:取極申一札之事(複写), 長野市公文書館
- 41) 風間共有文書:差出申一札之事(複写), 長野市公文書館
- 42) 真田家文書:明治四年中御所村・久保寺村堤川除普請所絵図, 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵
- 43) 長野市誌編纂委員会:長野市誌, 第13巻, pp.787, 2001.
- 44) 村田家文書:文政期御普請所絵図, 小柴見区村田家
- 45) 久保田家文書, 長野県立歴史館所蔵
- 46) 長野市誌編纂収集資料, 長野市公文書館

補遺

「千田村等四ヶ村煤花川中御所村新土堤切払い願ひ」⁴³⁾

「乍恐以書附御聴置奉申上候

中御所村西白岩先煤花川除土堤 御普請所東、先年栗田・千田・妻科・南俣・七瀬五ヶ村組合ニ而、山中往来形り扣土堤築立罷有、然ル処一昨年丑年煤花大満水ニ而御普請所扣土堤一時ニ水破仕、土手形相失押下村々数耕地荒処ハ勿論、人家水浸或ハ流失仕候次第ニ而、村々難波至極奉存候、則引続直様以 御情御手厚御普請被成下置、猶又右組合ニ而扣土堤再建普請行届無間茂、昨寅五月中又候右川大出水ニ而、御国役土堤 御普請所扣土堤共切川ニ相成、一昨丑年ヨリ押下村々別而荒処・悪地罷成、既ニ人家立退候程之次第、不得止事組合村々勿論、押下村々多人数罷出命を限り立働、切所悪水除ベ切普請仕、漸々相防候迄ニ而、然ル処新規ニ風間河組相組合七ヶ村ニ而、地元中御所村ニ示談之上、長貳百間・横七間又々扣土堤築立、表根堅枠御普請中之処、秋物仕附中相休、当十七日組合村々場所罷出見候所、御普請所御国役土堤御願江、右七ヶ村扣土堤元付凡長貳拾間余・横五間余矢乃羽土堤、右地元村ニ而地引央持普請手始有之、一同相驚右同村江七ヶ村ニ而普請迷惑之趣相届候所、先方ニ而申間候、地主銘々荒所開発仕候ニ付、泥留矢之羽土堤普請仕度旨願呉候趣願出ニ付、御願立仕候所 御聴届ニ罷成候ニ付、普請仕候趣申間候得、難打捨一同相談仕見候所、引続同組西川幅漸々拾八間程強水之節湛上逆水ニ而、一昨丑・寅兩年切川ニ罷成、数耕地押払候ハ歴前之儀ハ奉存候、此上万一今日ニ而水難引受候得、数耕地荒所ハ不及申、住馴候人家ニも銘々立離、年寄・妻子引連立退候而最早イ場も無之、哀当惑ニ罷在候程之仕合、然ルヲ矢之羽土堤普請中御所村三組ニ而築始メ、後難之仕向を受、左候共私共土堤組合ニ而前奉申上候通、普請仕残出来致度人足為相登候ハ、矢之羽普請相見留順々相繋村々一統之人氣相狂候難計、殊更中御所村之外新田僅之耕地ハ、押下村々五ツ壺分・六ツ壺分之高免ト掛合セ、以 御仁恵 御賢察被成下置度、余リハ押下数ヶ村敷敷奉存候、剩横捲り土堤川幅縦ニ而強水之節湛上、上続キ土堤数度水破仕、必至難波至極奉存候、依之可相成御義御座候ハ、中御所村江御理解被成下置、横捲り土堤数拾間切取川幅広度趣、去寅年中組合ハ川向久保寺一同ニ而奉願置候得共、今以 御沙汰無御座、其上無沙汰ニ私共自普請土堤ヲ取付 御国役 御普請所土堤御願江新規矢之羽土堤築立候義今般 御聞届相成、左候得ハ不斗大出水御座候而、当今ニも如何様之難波相品ニ候も難計、村々一統途方呉罷在候次第、乍恐御聴置奉申上候、此上幽ニ而御百性相続仕度奉存候間、御慈悲之 御意奉仰候、以上
慶応三年十月」

(2013.4.5 受付)